

## 近代資本主義論の生成 (一)

——ゾンバルト『近代資本主義』(初版 1902)の意義について——

田 村 信 一

### 1 はじめに

ヴェルナー・ゾンバルト (1863—1941) の代表作である大著『近代資本主義』は、これまでどちらかといえば「経済史」の古典的文献として扱われ、そこで論じられている「資本主義的精神」についても、同時代人ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で提起されたテーゼと比較して彼の理解の「折衷的」性格が強調されてきた<sup>(1)</sup>。その場合わが国の研究史においては、版を重ねた 1916 年の第 2 版の 2 巻本がテキストとしてもっぱら用いられ (1927 年に『高度資本主義』が第 3 巻として追加された)、初版と第 2 版の異同について立ち入って言及されることはほとんどなかった。しかしながら両者の間には著しく大きな変化が存在するのであって、ゾンバルト自身も第 2 版の序文の冒頭でいきなり次のように述べている。

「第 1 版刊行以来 15 年、ここに 2 巻本として世におくる『近代資本主義』の第 2 版が外観上まったく新しい著作であることは、目次を一瞥しても分かるとおりでである。前版から転用されたのはほとんど 1/10 にもみたく、しかもこの部分でさえそのほとんどは全く新たな構想のうちに整序されている。しかしながら書名を (別にそれを好んでいるわけではないが) そのままにしたのは、この著作の課題として論じられる根本問題が依然として同一であり、一連の基本思想も変わっていないからである。それにもかかわらず、この新版が内容的にも一つの新しい著作であることは、この研究に従事する人には第一章を読んだだけでも分かるであろう。」<sup>(1)</sup>

外観的・内容的にも「まったく新しい著作」であるが、「根本問題」と「基本思想」は変わらないとするこの文章は、しかしながら文字通り受け

取ることはできない。というのも、初版と第2版との間にゾンバルトの学問的立場が「根本的」に変容し、こうした変化が初版と第2版の相違に明瞭に現れている、との見解が近年のドイツにおける支配的見解だからである。簡単にいえば、マルクス主義の影響を強く受け、社会民主党修正派にほとんど重なる立場から社会政策と「資本主義の推進」を主張した前期のゾンバルトは、やがて資本主義のもたらす大衆社会状況に対して政治的・文化的アパシーを強めつつ、ロマン主義的立場を濃厚にし、マルクス主義の影響を払拭しながら歴史学派の本流に回帰していくのである<sup>(4)</sup>。いわば前期ゾンバルトの集大成が『近代資本主義』初版であり、後期ゾンバルトの立場を体系化したものが第2版といえよう。1890年にプレスラウ大学の員外教授となった彼が、1906年のベルリン商科大学員外教授を経て、ようやく1917年、『近代資本主義』第2版の評価によって初めて正教授(アドルフ・ヴァーグナーの後任)としてベルリン大学に職を得ることができたことは、こうした経緯を象徴している。したがって前述の文章には、こうした事情が抹殺されているのであって、その真の意味は初版を復元することによって初めて理解可能になるのである。

ところで初版は、19世紀末期の社会政策学会における社会政策を巡る世代間闘争に決着をつけるために、すなわちシュモラーを中心とする保守派の中産層保護政策に対して「資本主義的發展の不可避性」を論証するために書かれたものであるが、その場合、シュモラーの政策的主張の背後にある「歴史的方法」を乗り越えようとする意欲が前面に出されていた。彼自身の言葉によれば、「わが国の工業的發展の経過に関する数年来の空しい議論」に決着をつけ、「経験と理論の対立……かの神経質な対立の調停」を試みようとするものである。ゾンバルトはマルクスの学問的功績を大胆に評価しつつ、理論と歴史を総合する「理論的社会科学」を構築することによって歴史学派の立場から「方法論争」を克服し、社会政策の新しい基準を獲得しようとしたのである<sup>(5)</sup>。したがって初版は野心に満ちたセンセーショナルな、「前代未聞の」著作として世に送られ、同時代人の激しい議論を呼び起こした<sup>(6)</sup>。その直接の原因は、後述する特異な構成と論証の不備にあるが、しかしなによりも、本書によって初めて「資本主義」Kapitalismusという言葉が政治的・倫理的な運動用語からドイツの学問的世界に導入され、「資本主義的精神」kapitalistischer

Geist という術語が最初に登場したからである。<sup>(7)</sup>したがって、もしシュモラー以後の若い歴史学派の世代を「最新歴史学派」（シュンペーター）と呼び、彼らによって「方法論争の克服」、「近代資本主義」の歴史的形成あるいはそれを内面から押し進める「資本主義的精神」、といった一連のテーマが問題とされたとするならば、まさにゾンバルトはその先頭に立つ問題提起者であり、彼によって 20 世紀初頭のドイツにおける社会科学の問題設定の枠組みが形成されたといっても過言ではない。

こうした理解がむしろ同時代人の通念に対応していることは、例えばラッハファールがヴェーバーの「プロ倫」について、「ゾンバルトの『資本主義』に刺激されてなされたもの」と受け取っていること、しかもこの解釈がヴェーバーの良き理解者である「トレルチにならって」行われたものであることから推測することができる。<sup>(8)</sup>しかもヴェーバーの「プロ倫」における次の記述は、そのことを間接的に証明しているように思われる。

「以下の諸研究は、全文にわたり重要な諸々の観点についてずっと古い諸研究に遡るものではあるが、その定式化についてはゾンバルトの鋭い定式化を含む大研究がすでにあつたというただそれだけのことにいかに多くを負っているかことさら強調するまでもないことである。我々の見解が別れる場合においても、——いや分かれる場合においてこそ——まさにそうである。ゾンバルトの見解につねづね決定的な反論をかきたてられ、その諸テーゼを端的にしりぞける者も、この点は自覚する義務がある。[この作品に対するドイツの国民経済学者からの批判の態度は、まったくもって恥さらしといわねばならない。ゾンバルトの特定の歴史的テーゼと最初に、しかも詳細な、ザッハリヒな対決を企てたのは一人の歴史家（『歴史学雑誌』[1903]のペロウ）であり、長いこと彼が唯一の人間であつた。——しかしゾンバルトの作品の国民経済学固有の部分に対してどういう批判が「果たされた」かといえ、<sup>(9)</sup>『浅薄』といつてもなお誉めすぎたといふべきであろう。]」

明らかにヴェーバーは、決定的な点でゾンバルトに対する恩義を感じており、「ザッハリヒな対決を」を回避する「ドイツの国民経済学者」に激しい怒りを表明していたのである。ヴェーバーはゾンバルトの問題提起の正当性を断固擁護したのであり、その上で自ら「ザッハリヒな対決

を企てた」のではないだろうか。<sup>(10)</sup>

## 2 ゾンバルトのマルクス受容

ゾンバルトがシュモラーの下で学位論文「ローマのカンパーニャ」(1888年)を提出した当時、彼はロートベルトゥス・ラザール・ヴァーグナーの系譜に連なる国家社会主義者であった。学位論文で彼は、近代イタリアにおける土地所有貴族の個人主義的営利関心が放牧地の拡大と農民のプロレタリア化をもたらしたことを批判し、国家的植民政策による農民所有地の維持を提起している。こうした政策的関心は、自ら甜菜糖農場を所有し、社会政策学会における内地植民論のイデオログとして活躍した父親アントン・ルートヴィヒ・ゾンバルトの直接的影響であるが、分割地所有拡大のための大土地所有の私的イニシアティブをも重視するシュモラー・アントンの路線よりも、大土地所有批判と国家的イニシアティブを強調するヴァーグナーの立場に一致していた。<sup>(11)</sup>

やがてゾンバルトはブレーメン商業会議所法律顧問(1888年)として都市の具体的な社会問題(家内工業)に関わり、プレスラウに移ってからも、ゼミ学生を連れて家内工業の実態調査に出掛けるようになった。家内工業は労使関係の健全な発展を阻止し、工業組織の発展を遅延させるとの観点から、国家的労働者保護を家内工業に拡大することを要求するようになる。こうして彼は、「市民的社会改良家」としてプレスラウ市参事会にも関与し、その過程で社会民主党のハインリヒ・ブラウンと親密な友情関係を結ぶようになった。ゾンバルトの(エミール・ゾラの影響を受けた)「リアリズム」的立場をマルクス・エンゲルスの著作と結び付けたのは、このブラウンだといわれている。<sup>(12)</sup>ではゾンバルトはマルクスをどのように受け入れたのだろうか。

1894年の論文「カール・マルクスの経済学体系批判」<sup>(13)</sup>は、この問題に解答を与えるための格好の材料を提供している。同年のマルクス『資本論』第3巻の刊行を機にブラウンの要請によって書かれたこの論文は、マルクス体系の本質を「反資本主義的倫理」から理解すべきだとするJ・ヴォルフに対する批判を意識したものであった。<sup>(14)</sup>ゾンバルトによれば、「資本主義的に秩序付けられた経済生活の経験的形成」を叙述したマルク

スの核心は、利潤の蓄積＝「資本の価値増殖」という観点から経済過程のダイナミクスを明らかにしたその「客観的」・「反倫理的な性格」にある。「マルクス体系の『反倫理的』性格こそ、たとえばロートベルトゥスらのそれと区別されるものであり、……経済発展の理論——これこそマルクスの要諦である——は重要な社会主義体系のいずれにも知られていない……。」(S.556, 559. 邦訳 49—50, 56 ページ)「利潤率 [平均利潤率の成立とその傾向的低下の法則] は推進力として [発展] 理論の中心に据えられ、その作用をつうじて資本主義的生産様式は終結点に駆り立てられるのである。」(S.565. 邦訳 67 ページ) こうした「反倫理的」という理解の根底にあるのは、マルクスの価値法則に対する次のような把握であった。

「マルクスにおける価値概念は、実質的に規定すれば、経済的存在の基礎としての労働の社会的生産力という事実を表す経済的表現以外のなものでもない。してみると『価値法則』とはなんなのか。それは形式的に規定してみるとこうなる。すなわち、商品の価値が経済的過程を——換言すれば資本主義的経済秩序において——『究極的に』支配するということ、これである。……すなわち資本主義的経済秩序の法則としての価値法則はまったく一般的に、商品の価値は、すべての経済的過程を支配する労働の社会的生産力が究極的には規定的に自らを貫徹する特殊歴史的形態である、という内容を持っている。労働の生産力の程度、その変化などは、生産の代表者ないしなんらかの経済を営む個人の意識にのぼることなく、価格や剰余価値率、ようするに経済生活の総体的形成を究極的に『決定する』もの、すなわち個人の恣意にはっきりした限界を与えるものなのである。……『価値概念』は、もとより思考の補助手段である。しかし、私が経済生活にとって決定的な客観的事実——社会的に規定された労働の生産力——を価値の対象とすることによって、『価値法則』は事実上経済生活全体を支配する法則、あるいはより正しくは『規整的原理』となる。したがってマルクス価値論の意義は、人間社会の経済的存在を客観的に支配する技術的事実に適合的な経済的表現を発見した、という点に求められるであろう。」(S.576-7. 邦訳 91—2 ページ)

以上の論述は、ゾンバルトが価値の源泉を労働に求めるという意味で「労働価値説」を受容し、その特殊資本主義的形態として「価値法則」を

独特の形で受け入れたことを示している。マルクスは「価値法則」を、労働時間による価値量の規定として人間の意志から独立した物理学的な「自然法則」の意味で展開したが<sup>(15)</sup>、ゾンバルトは労働時間による価値量の実体的規定ではなく、「思考の補助手段」として「理念型」的に理解する一方、その「理念型」的構成が恣意的なものではなく、資本主義的生産過程によって作り出される商品の価値とその実現が我々の意識と行動を規定し制約＝「規整」する局面に着目して、「価値法則」の意義を承認する。もし「価値法則」を「思考の手段」とする立場が素朴な唯物論に対立する主観主義的・観念論的立場の表明だとするならば、彼はこうした立場から経済的過程のもつ人間存在への唯物論的規定性を承認し、この局面における表現として「価値法則」の意義を認めたことになる。したがって彼は、社会的労働によって作り出された価値の一部が「剰余価値」として資本家に取得されることも事実として認める。

「資本主義的経済秩序の独自性は、社会的労働の一定量が資本によって取得される、という事実のみ存する。資本によって取得された社会的労働のこの量が資本主義的意味での総剰余労働、つまり剰余価値である。」(S.578. 邦訳 94 ページ)

しかしながらゾンバルトは、こうした資本家と労働者の関係が必然的に「搾取」として「階級的敵対関係」の物質的基礎を形成する、とする見解に反論する。

「[マルクス] 体系の中に『必要』労働の高さを必要最低限に固定する必要は決してない。労働者の主力部隊を生活資料の最低限へ制限しようとする傾向が支配するということは、マルクスの経済体系の構造にとって重要ではない事柄である。私の理解では、このことは、労働力の価値が所与の時代・特定の国において特定の大きさとして仮定されることができる、と主張するだけにすぎない。」(S.580. 邦訳 98 ページ)

この搾取論・窮乏化論の拒否は、社会政策学会に所属するゾンバルトにとって当然であっただけでなく、彼の価値論理解からも帰結する。すなわち「価値法則」が『規整的原理』ならば、それは個々の商品価値量(価格)や剰余価値量(利潤)あるいは必要労働価値(賃金)の実体を直接表現するものではないのである。彼にとって『資本論』第3巻は、価値＝剰余価値論から平均利潤率の概念構成によって見事に生産費・利潤

論へと展開したものとして高く評価された。資本の有機的構成と剰余価値率の相違に応じて生ずる利潤率の相違は、生産部門間の競争を通じて平均化され、費用価格プラス平均利潤＝生産価格が形成されて等しい投下資本量に対して等しい利潤が実現し、総利潤と総剰余価値は一致する、というマルクスの論証はまさに「天才」的業績であった。「商品の価値が経済的過程を——換言すれば資本主義的経済秩序において——『究極的に』支配する」ことを、マルクスは首尾一貫して提示したのである。

したがってここで示されているのは、「形式的には生産費は価値とは何ら関わりもなく利潤は剰余価値とは何ら関係もない……。価値と剰余価値によって……[マルクスの表現では]『社会的事実』（労働の社会的生産力——社会的剰余価値と必要労働の関係）が確認され、我々の指向にとって分かりやすいものにされるのである。生産費と利潤は、それ自身個人的・私的な営利生活の経験的事実であり具体的な生産代表者の計算関係である。」（S.581. 邦訳 100 ページ）もしこのような計算関係を問題にすることが狭い意味での「経済理論」だとすれば、「マルクスは経済的現象の理論を与えようというのではない。むしろ資本主義的経済秩序の『内的な』合法則性を発見しようとしたのである。」（S.583. 邦訳 104 ページ）

このようにゾンバルトは、物理学的な「自然法則」の発見者としてではなく、歴史的に生成した「資本主義的経済秩序」の下で、「価値法則」という逃れることのできない「合法則性」の規定を受けていることを発見した「天才」としてマルクスを評価し、彼の「市民社会の解剖学」としての「経済学批判」を搾取論と窮乏化論を抜いた経済「発展の理論」として受容したのである。次の文章は、ゾンバルトのマルクス評価がどのような関心から行われたかをはっきり示している。

「マルクスにおいて問題となっているのは、動機付けではなく、経済主体の個人的恣意の制限である、といえよう。マルクスの経済学体系を特色付けるのは極端な客観主義である。……これと対立するのが主観主義的方向であって、それは経済生活の経過を究極的に経済主体の精神 [Psyche] から説明しようとし、経済生活の合法則性を心理学的動機付けに置き換えるのである。……現在の国民経済学の状況は、当然のことながら心理学主義に帰着する主観主義の支配によって特徴付けられるように思われる。……歴史的・倫理的・有機的・抽象的・古典的その他どの

様に呼ばれようと、主観主義的国民経済学が輝かしい未来に向かって進んでいるのか、それともその発展の終局に向かっているのかをここで決定する必要はない。これらが解体しつつあり、その遺産を一方では歴史に、他方では心理学に委ねつつあるのかどうかとも同様である。ここで指摘すべきは、国民経済的思考の二つの世界がほぼ独立に成立して並存していること、科学的考察の二つの在り方が名目以上に共通なものを持っていないことである。」(S.591-2. 邦訳 121—3 ページ)

19世紀末期のドイツにおいては、歴史学派の「倫理的社會政策」と歴史の發展段階論が、あるいはオーストリア学派の限界効用理論が、それぞれ「心理学」にその科学的根拠を求めて競合・並存していたのであり、ゾンバルトはこうした「心理学主義」にマルクスの「客観主義」を接続することによって、「倫理的社會政策」を断ち切り、「国民経済的思考の二つの世界」を統合することによって、新たな「社会政策の基準」を獲得しようとしたのである。

### 3 『近代資本主義』の構成と内容

まず始めに『近代資本主義』初版の編別構成を簡単に提示しておこう。

#### 第1巻 資本主義の発生

第1分冊 手工業としての経済

第2分冊 近代資本主義の発生

第1部 [タイトルなし]

第2部 資本の成立

第3部 資本主義的精神の発生

第4部 工業的資本主義の端緒とその発展の障害

第5部 初期資本主義時代末期における工業と資本主義

第6部 現代における工業的資本主義の凱旋行進

#### 第2巻 資本主義的発展の理論

第1分冊 経済生活の新しい基礎

第2分冊 経済生活の新形成

第1部 近代的農業の成立と土着の旧経済制度の解体

第2部 近代都市の起源とその本質



- 第3部 需要の新形成
- 第4部 財販売の新形成
- 第3分冊 工業的競争の理論
  - 第1部 [タイトルなし]
  - 第2部 最善の給付のための闘争
  - 第3部 価格闘争
  - 第4部 障害

以上のように本書は、第1巻「資本主義の発生」と第2巻「資本主義の発展の理論」の2巻から構成されている。第1巻では資本主義の前提条件となった手工業との対比で、物的・客観的な資本と資本主義を内面から押し進める主体的な「資本主義的精神」の成立が発生史的に問題とされ、資本主義の勝利と手工業の資本への従属のプロセスが叙述される。第2巻では「資本主義的精神」を推進力とする資本主義が、手工業を解体し発展する理由を、資本主義に内在する諸条件の検討をつうじて歴史に即しつつ理論的に解明しようとするものである。本書を全体として貫く特徴は、手工業と資本主義との二分法的峻別であり、本書のモチーフは簡単にいえば、なぜ手工業は没落し、資本主義は発展するのか、という問題であった。

#### a 経済と経営の体系学

ゾンバルトは本論に入る前に、経済活動の概念的体系化によって問題を総括的に提示している。彼によれば、経済活動とは「秩序化された扶養の配慮」であり、それは労働による「意識的計画の実現」と人々を結合する「客観的規則」という側面を持つ。「人間の経済的行為を外的に規制する規範の総体を経済秩序 [Wirtschaftsordnung]」と呼べば、それは「ジッテと法」をつうじて、生産・流通・消費において個々の人間を規定する受動的な「客観的制限」を表し、他方個々の人間は、経済生活の能動的な「経済主体 [Wirtschaftssubjekte]」として表れる。「経済秩序」と「経済主体」の関係は無関係ではなく、例えば、前者が個人を主体とするか集合的人格を主体とするかの決定をも含む、という意味で「経済秩序」は「経済主体」を拘束している。こうして彼は、「ある時代の経済生活をその特徴的独自性において規定し、したがって歴史的に条件付け、

経済主体の行動の原則・格率……となる推進力」を「経済原理 Wirtschaftsprinzipien」と呼ぶのである。ここでゾンバルトがあらかじめ、経済感覚・営利衝動・エゴイズムなどの表現で「推進力」を説明しようとする試みに対して、それらが「一般的な動機の一覧表」に他ならず、「ある時代の経済生活をその特徴的独自性において規定」するものではない、と批判していることに注意すべきであろう。そして特定の「際だった経済原理」に支配される「経済秩序」が、「経済体制 [Wirtschaftssystem]」である。(S.3-4.)

さて「経済原理」は、目的意識的な行為として「目的に対応する特定の様式で組織される」経済活動に具現されるが、その場合、特定のジッチ・法や慣習と特定の類型的な経済行為を含む組織が「経済単位 [Wirtschaftseinheit]」としての「経済の組織形態 [Organisationsformen]」であり、「その規則的の反復のために統一的に秩序づけられた労働過程」が「経営 [Betrieb]」および「経営形態 [Betriebsformen]」である。ここでの議論の眼目は、「経済の組織形態」=「経済形態」と「経営形態」の概念的峻別であり、具体的には手工業=小経営、資本主義的企業=大経営という混乱に対する批判であった。(S.5-8.) 次にこうした概念を使って展開されたゾンバルトの経済と経営の歴史的体系学 [発展段階論] を、彼が提出した図 (S.67.) を補足しつつ総括的に概観してみよう。

経営形態      個人経営(1. 単独経営   2. 家族経営   3. 職人経営)  
                  [小経営]—過渡期経営 (4. 拡大職人経営 [中経営] 5.  
                  大規模な個人経営 [大経営] 6. 小規模な社会的経営 [中  
                  経営])—社会的経営 (7. マニユファクチュア   8. 工  
                  場) [大経営]

経済体制  
 の類型      1. 原始的種族経済— 2. 家共同体の大家族経済— 3.  
                  拡大自給経済— 4. 分化した拡大自給経済 (グルントヘ  
                  ルシャフト)— 5. 村落経済— 6. 交換経済とくに都市  
                  経済— 7. 社会主義経済— 8. 古代の奴隷経済— 9. 近  
                  代植民地の奴隷経済— 10. 自由な賃金労働をもつ資本主  
                  義的流通経済

経済体制　　欲求充足経済 Bedarfsdeckungswirtschaft [1~7]—営  
のグループ　利経済 Erwerbswirtschaft [8~10] (それぞれの経済体  
制の中で「初期 Früh」・「高度期 Hoch」・「末期 Spät」が  
「経済時代 Wirtschaftsepoche」として区別される。)

経済形態　　1. 種族経済— 2. 家族経済— 3・4. オイコス・フロン  
ホーフ— 5. ゲマインデ経済・農民経済— 6. 手工業的  
組織— 7. 共同経済的アンシュタルト (集権的)・協同組  
合 (分権的)— 8・9・10. 企業

経済段階　　個人経済 [1~3]—過渡期経済 [4~6]—社会経済 [7~10]

ここでは、「経済段階」の区別のメルクマールとして「生産諸力の発展の程度」が明示的に述べられているように (S.56.)、またビューチャー、シュモラー、マルクスの名前を上げてそれぞれ批判的に言及されているところから明らかなように、歴史学派とマルクスの発展段階論を独自に総合しようとするものであった。<sup>(17)</sup>しかしその場合、「体系学」という言葉を使用することによって、いわゆる「発展段階論」を乗り越えようとする意図も込められていた。ゾンバルトは、ここで提示されている「段階的連鎖は経験的・歴史的連続と理解されるべきではない」と述べ、この体系学を「深い学問的認識目的のために比較的価値のないもの」として、その「道具」的性格を強調していることに注意すべきであろう。(S.27, 70.) 彼は、歴史法則として実体化されやすい「発展段階論」を、いわば「発見的価値」を有する純粋な概念的「体系」の方向に向かってさらに押し進め、<sup>(18)</sup>マルクスの段階理論をもその射程に含めたことが彼の新機軸であった。このような総合が矛盾を含んでいることは、例えば、上記の図式において、「経済形態」としては「企業」に対応する「経済体制の類型」における「古代の奴隷経済」の位置を見れば明らかであろう。発展段階としては「社会経済」段階である「古代の奴隷経済」が、歴史的にはなぜ「都市経済」に先行するのかの説明はないのである。

そしてゾンバルトの思考様式を先行の段階理論と対比していえば、次のように総括することができよう。シュモラーの発展段階論は、自給経

済から交換経済への発展を出発点にしながら都市経済—領邦経済—国民  
 経済という経済圏の空間的拡大をメルクマールとしつつ、段階発展にお  
 ける政策的指導（倫理的要素—重商主義）を強調し、経営的發展として  
 は家経済—半企業—手工業—企業の段階連鎖を構想した。ビューヒヤー  
 のそれは、同じ経済圏の空間的拡大の起動力を主観的効用の拡大に求め  
 て、経営形態の発展を、家内仕事—賃仕事—価格仕事—手工業—問屋制  
 —工場制として展開した。<sup>(19)</sup> ゾンバルトは、こうした経営的發展の議論を  
 批判的に継承しつつ、生産諸力の発展をメルクマールとするマルクスの  
 段階論を取り入れ、マルクスの経済的社会構成体の発展シエーマの中核  
 をなす生産関係・生産様式概念を避けて、経済体制概念に置き換えたの  
 である。その理由は、周知のようにマルクスの場合、「生産諸力の一定の  
 発展段階に対応する生産関係」は「人間の……意志から独立した諸関係」<sup>(20)</sup>  
 であるのに対して、ゾンバルトにあっては、生産力の発展はなによりも  
 まず、「経営形態」における「個人経営」から「社会的経営」への発展に  
 ほかならないが、そこにおいて経済主体の側での「経済原理」の転換、  
 すなわち「欲求充足経済」から「営利経済」への転換が決定的と考えら  
 れているからである。

「欲求充足経済」においては、「生産の量と質を決定するのは一人の人間  
 あるいは人間の集団の欲求」であり、「人間性がすべての生産の尺度を  
 与える」のに対して、「営利経済」では、「生産量の限界と生産の在り方  
 の決定を与えるのは、生産物の価値増殖によって利潤が獲得される可能  
 性だけ」であり、実際には利潤の増大を志向する努力には限りがないか  
 ら、「生産には決して限界がない」のである。(S.62.) したがってここで  
 は主体（人間）と客体（生産）との転倒が生じている。

こうしてゾンバルトが、「個人経営」の本質を「生産要素の配列が生産  
 物を個々人の労働者の生産物として現れる」ところに求め、「社会的経営」  
 とは、「生産要素の配列が生産物を全体の労働者の生産物として現れ  
 る」=（生産過程の社会化）ことと定義しつつ（S.26.）、生産過程の社会化  
 の完成形態である「工場」において、「生産過程にとって決定的に重要な  
 部分が、労働者の構成的協働から自立せしめられ、生命のない肉体の自  
 動的に動くシステムへと移され」、「個人的・人間の活動の余地がもはや  
 存在しなくなる」(S.26.)と強調する場合、このような生産力の発展が「営

利経済」への転換をつうじて、いわば人間の「疎外」によって購われていることを意識していた。そしてゾンバルトにとって「営利経済」への転換は、マルクスの「人間の……意志から独立した諸関係」ではなく、「目標設定とその実現によって客観的全体に生命を吹き込む」「経済的人間 [Wirtschaftende Menschen] という創造的要素」(S.60.)なしに理解することは不可能であった。

こうした意味でゾンバルトの「体系学」は、生産諸力の発展を極限まで押し進める「営利経済」への転換を、具体的にはヨーロッパ中世のうちに、「欲求充足経済」段階の手工業から資本主義的企業への「発生的考察」を行うための予備的考察にほかならなかったが(S.70.)、こうした問題意識に規定されて、概念的には、前述の「古代の奴隷経済」と「資本主義」との関係、あるいは「資本主義」と「企業」との関係は、まったく論議の対象とならないという重大な欠陥を含んでいた<sup>(21)</sup>のである。

## b 手工業

さてゾンバルトは、狭い意味での手工業を、技術的には「営業的消費対象の完成・加工のために芸術と通常の手作業の中間的技能を利用しようとする営業的労働者の指向から生ずる経済形態」(S.76.)と定義し、しかもそれが自己の「生計」を等価物との交換によって獲得する点を指摘している。

ところでこの手工業という「経済形態」の本質に属するものは、一方では、生産が「特定的人格の流出」として、いわば「人格の表現」として「労働の有機的機能」と分かちがたく結び付いているところにある。(「全人格としての労働の理念」)手工業者は、生産過程に対する支配者として「生産手段に対する処分権」をもつが、その商人的・組織管理者的機能はむしろ「個人財産と経営財産の未分離」=「家長」を表現するのであり、人間的資質としては「芸術家的・技術者的」能力を必要とするが、それは技術「革新 [Neuerung]」が「偶然」的なものである、「経験的」技能(=製品は個人の作品とする職業への名誉感)として現われる。したがって他方では、彼らの本質として、「身分に相応しい暮らし」=(Nahrungの原則)と「自由な独立した個人」としての「独立 Selbstständigkeit」の指向が生ずる。(S.79ff, 113f, 188, 141ff.)

このようなゾンバルトの手工業把握は、ここで言及されている、手工業を近代的大経営への中間形態と見るビューヒャーやシュモラー、あるいは手工業におけるツフットの競争の排除を強調するシェーンベルクの見解と比較すると、その前近代的な身分指向の強調や手工業の本質規定におけるツフット指向の否定（むしろそれは手工業の危機に対する対応と理解される—S.159.）と共に、手工業活動の「人間的」性格を強調する極めてロマン主義的な色彩を帯びているところに特徴があるといえるだろう。その点では歴史学派を越えてアダム・ミュラーの手工業身分論に著しく接近しているように思われる。<sup>(22)</sup>ゾンバルトは、ロマン主義の手工業論に訴えて、歴史学派の手工業論を断ち切ろうとしたのではないだろうか。

さて彼の手工業論のもう一つの特徴は、こうした技能的手労働に基づく「欲求充足的」な交換経済組織を、「広義の手工業的組織」として拡大し（S.77.）、「前資本主義的商業」をも手工業的活動の延長として把握していることである。彼は、「企業」形態を取らず当座商業として展開される前資本主義的商業の本質を次のように述べている。

「中世には資本主義的感覚を有し、経済的訓練を受けた商人が多数存在した、とする見解ほど愚かなものはない。旧いタイプの商人の特殊手工業の本質は、なによりもその目標設定の独自性に現れている。彼らにとっても、近代的企業家の意味での利潤追求はとんでもないことである。彼らも自らの手によって、良くも悪くも身分的生計費を稼ぐ以外にはなにも……欲しない。彼らの全体の活動もナールンクの理念によって支配されているのである。」（S.169.）「彼の『業務遂行』は……工業の同僚と同じくまったく経験的・伝統的 [traditionell] である。」（S.177.）

ゾンバルトは、会社形態を取り始めた「コンメンダ」という出資金がなお「資本の性格」を持たず、手工業的意味での「経営元本」であること、「14世紀末までのイタリア商業と16世紀に至るまでのその他のヨーロッパ商業が手工業的性格という見誤ることのできない刻印を受けている」ことを強調している。<sup>(23)</sup>（S.182, 188.）

このような手工業としての「前資本主義的商業」の性格規定は、ゾンバルト自身が言及しているように、暴力的契機を強調するマルクスの「資本の本源的蓄積」論や、当時「支配的な」ピレンヌの「商業利潤蓄積」

説に対する批判を意識して展開されていた。(S.218ff.)ここでのポイントは、これまでの議論がニュアンスの相違はあれ、資本ないし利潤の蓄積が中世における「通常の経済活動の中で」行われたとする前提条件の上に成立しており、ゾンバルトはまさにこうした前提条件を問題にしたのである。もし中世の経済活動の本質が「手工業的」な「ナールンクの原則」にしたがって遂行されているとすれば、そこから「資本主義」は論理的に成立し得ない、これが彼の主張である。「手工業の繁栄の前提は、資本主義の存在が結び付いている諸条件が満たされないことである。」(S.156.)「資本形成の決定的モメントは、手工業的性格を持つ通常の経済的経過の外側で探し求められねばならない、という仮説に我々を導く。」(S.228.)

こうしてゾンバルトは、以下の論述に見られるように、「ナールンクの原則」を手工業や商業のみならず、中世の貨幣的経済活動全般にまで拡張するのである。

「[最初に大きな貨幣財産を蓄積した王侯・司教・教皇・修道院・騎士団]のすべてに共通する見解は、戦争や十字軍を引き起こすにせよ、貧者や困窮者を保護するにせよ、あるいは家族に快適な生活を整えるにせよ、貨幣は支出のために存在するということである。どこにおいてもすべての前資本主義時代の基本思想が帰着するところによれば、富を持ち、そのことで特権を持つ人々は、経済的事柄に悩む必要はない。こうした見解は、過去の時代の私的な貨幣所有者にも伝染する。騎士の理念に対応するのは、富の獲得もその利用も汚れた経済活動とは何の関わりもない、という観念である。財産を創出し保証するものは剣と槍であり身分に相応しい生活が財産の目的に適った利用となっている。『営利生活』は貧者のなすべき事柄である。……我々は、16・7世紀のスペインの商人や産業家が、十分な富を獲得するや否や、それで土地財産を購入して貴族に見られるために、まったくの騎士的精神によって営業生活から引退したことを知っている。」(S.378-9.)

では、中世の全経済生活が、このような「伝統的」・「身分的」な「ナールンクの原則」=「欲求充足的原理」に支配されているとすれば、「資本」ないし「資本主義」の成立はどのように説明されるべきであろうか。

## c 資本主義

ゾンバルトによれば、形式的には「資本主義とは、その独自の経済形態が資本主義的企業である経済様式〔Wirtschaftsweise<sup>(24)</sup>〕であり、「貨幣評価に基づく……契約によって利潤を獲得し物的財産の所有者を再生産する経済形態」(S.195.)である。しかし実質的には次のことを意味する。

「我々の経済形態の目的が経済主体の生きた・個人的人格から分離されること……ここにおいて、目的自体の抽象性とかくてその無限性が、資本主義的企業の決定的メルクマールとしてただちに表現される。……なによりも重要なことは、……資本主義的企業の業績の質と量が資本の価値増殖〔Verwertung〕という非人格的観点の下でのみ考察されることができ、ということである。……資本主義的企業の枠内で遂行される活動を決定するのは、必然的に（例えば手工業のような）経済主体の個人的能力ではなく、物的財産の使用によって解き放たれた任意の他人の力と才能である。こうした事情の中にすべての資本主義経済が展開できる膨大なエネルギーの理由がある。……複雑な心理学的プロセスを経て、最終的に資本の価値増殖は……物的財産の所有者にとって、強制力によって押し付けられる客観的必然性として現れる。本来著しく人間的な心的気分であった利潤欲ないし営利衝動は、かくて客体化される。」(S. 196-7.)

以上の論述から明らかなように、手工業とはまったく正反対に、資本主義においては、経済生活の目的＝営利が経済主体の人格から分離し企業組織そのものに体现化され（抽象化）、利潤獲得・営利衝動が経済主体に対して強制的に課せられ（客体化）、しかもそれは人格から分離されて目的自体となっているために、限度がない（無限化）のである。こうした「非人間的」性格を資本主義（的企業）の本質と見なしたことは、ゾンバルトが当時発達しつつあった巨大企業をモデルとして概念化したことを示唆している<sup>(25)</sup>。

彼によれば、資本主義的企業の持つ本質的特徴を目に見える形で表現しているのが複式簿記にほかならない。

「商品あるいは労働給付の提供に関するすべての契約内容からあらゆる質的区別が奪われて、量的区別のみが表象され、そうして数字による



債務と債権の勘定が可能になる。元帳の借方と貸方が資本主義的企業家に有利になるよう残高をともなって決算されること、こうした結果の中に資本主義的組織において行われる行動のあらゆる成功と内容が閉じ込められているのである。」(S.197.)

したがって経済主体としての企業家は、物的財産と多数の他人労働とを合理的に組み合わせ、複式簿記において利潤が残るように計算しなければならない。ゾンバルトは、企業家の活動の本質と在り方を、「指令的・組織的 [disponierend-organisierend]」、「計算的・投機的 [kalkulatorisch-speklativ]」、「合理主義的[rationalistisch]」という三つの言葉で表現している。(S.198f.)

資本主義的企業と企業家の本質的属性が以上のように把握されれば、資本主義が成立するための客観的条件は、一方では貨幣財産という形態での「物的財産」が企業家のもとに蓄積されていることであり、他方では企業家の心的態度として「資本主義的精神」が存在することである。

「資本主義的企業にあっては物的財産の価値増殖が問題となるから、資本主義的企業への第一歩が踏み出される以前に、相応の高さの物的財産が経済主体の処分権の中に堆積されていなければならない。……資本主義的組織の存在にとって必要な客観的条件を先取りしていえば、そもそも資本主義が考えられる以前に社会はその価値観念を一般的等価物、すなわち貨幣——もっと正確に言えば金属貨幣(あるいはその代用品)——という抽象的形態においてすでに対象化していなければならない。というのもこうした前提の下でのみ、資本主義的企業の本質に特有の経済態度の計算性[Rechenhaftigkeit]が、……考えられるからである。……我々は資本主義の歴史的生成を追求する箇所、とりわけ急速かつ大量の貨幣蓄積という事実が、経験的にも物的財産の価値増殖に対する刺激として極めて重要な作用を果たしたことを示すことができるであろう。」(S. 205-7.)

「蓄積された貨幣額が資本へ転化するために財産を持つ経済主体に追加しなければならないものは、独自の資本主義的精神 [der spezifisch kapitalistische Geist] である。それはなにかといえば、資本主義的企業家に特有の心的気分、すなわち利潤欲 [Gewinnstreben]・計算感覚

[kalkulatorischer Sinn]・経済的合理主義 [ökonomischer Rationalismus] である。」(S.208.)

この論述が示しているように、ゾンバルトは「資本主義的精神」という言葉を単なる「利潤欲」ではなく、むしろそれを批判するために、「計算感覚」と「経済的合理主義」が追加された独自の「精神」という意味で提起したのである。

ところでゾンバルトは、前述の貨幣財産の蓄積とならんで、資本主義成立のもう一つの客観的条件についてふれている。彼は、形式的には生産手段の私有財産制に基づく法秩序の存在を挙げつつ、他方では第1に「利潤・利子取得の客観的可能性」、すなわち資本主義的企業にとって「利潤はいかにして可能なのか？」の問題を論じている。すでに指摘したように、ゾンバルトはマルクスの価値論を、労働による価値の形成と平均利潤率の形成による総剰余価値の社会的分配という局面において受容し、個々の資本家による剰余価値の取得を個別の利潤の源泉とする搾取論を否定していた。この議論が資本主義の成立に適用されるのである。すなわちスミスが言うように、「国民の年々の労働はすべての必需品と便益品を供給するファンド」であるが、この意味での労働は、企業家や公務員の労働ではなく、生産過程における「技術的労働者」のそれである。したがって「技術的労働者に属さない人々は、技術的労働者の労働が自ら取得ないし費消する財の量を越えて供給する……余剰所得 [Mehrerträgen]<sup>(27)</sup> に対する分け前によって生活する。」(S.211.)

企業家利潤は現実には、商品・サービスの売買によって生ずるから、資本主義成立期における「利潤形成の可能性」の問題は、「自分の労働によって支払うことができる」自由な農民・手工業者・賃金労働者・賦役農民が「拡大された顧客層」として現れること、そして「他人の労働で支払うことができる」国家および君主の財政・土地レント取得者・自由業者・官僚・資本主義的企業家の需要を前提とするだろう。前者は「稠密な人口の定住」あるいは「高度に発達した輸送技術」を前提とするから、現実には後者の形成こそが重要な前提条件である。このように論じてゾンバルトは、後者の形成を他人労働への「参加権の先行的蓄積」として決定的に重視するのである。(S.214-215.) それは、封建的剰余労働の成果が君主や土地貴族に集中し、購買力として市場に放出されること

を意味するだろう。<sup>(28)</sup>

以上の議論を総括していえば、資本主義以前の手工業や商業から資本主義を連続して把握すべきではないと考えるゾンバルトにとって、歴史的にはまず封建制における「他人労働への参加権の先行的蓄積」が存在し、続いてこうした「封建的富」が利潤その他のなんらかの形で「資本」に変容しつつ、「資本主義的精神」が追加されることによって資本主義が成立することになる。

#### d 資本の成立

こうしてゾンバルトは、いよいよ具体的な資本の成立を問題とするのであるが、まず注意しなければならないことは、彼が資本の端緒的成立を小規模な資本ではなく、「大財産」の成立として問題にしたことである。その理由は明確に議論されていないが、明らかに前資本主義的手工業・商業活動を資本主義の先行形態と見なさず、巨大企業を資本主義企業のモデルとした彼の態度から帰結しているように思われる。

さてゾンバルトは、手工業活動における財産の蓄積を否定した後で、財産の移転[Vermögensübertragung]（封建的富の近代的富への変容）を論じている。もし貨幣蓄積がゼロから行われたとすれば、そのプロセスは、次のようになるだろう。まず中世において資本に転化しない財産の巨額な蓄積が、教皇庁・騎士団・国王・荘園領主・都市などの財政高権という形で出現してくるのであるが、貨幣経済の発展と財政管理の進歩・複雑化にともなって、実際に財政権を行使する「資本家・ブルジョア・財政家という新しい階級」が出現し、いわば「封建的財政管理の市民化」が生じる。彼らは、最初「俸給や着服」をつうじて「財産」を形成し、さらには「税収の質貸借」ないし「財政高権の抵当化」をつうじて、より大きな財産を形成する。しかしながらこの過程において重要なのは、十字軍遠征以降の都市の成立が土地貴族の奢侈的消費を誘い、貴族への貨幣貸付と抵当流れによって、市民の私的土地所有が成立したことである。こうして「封建的富」が「近代的富」へと変容していくのである。(S.235ff.)

しかしこうしたプロセスは、その最初が「俸給や着服」であることから明らかなように、幸運に左右される「カタツムリの歩み」(S.269.)の

ごときものである。そこでゾンバルトは、中世末期の商業中心地でみられた「富裕階級と都市大衆の明確な分離」に着目する。

「さしあたってまったく疑問の余地がないことは、ヨーロッパ中世の諸都市、少なくとも富の成立にとって唯一問題となる繁栄する大商業中心地においては、すなわちフィレンツェやブルージュ、アウグスブルクやロンドン、モンペリエやバーゼルにおいて、時と共に大多数の都市住民と対立しつつ、富裕階級が分離されてくることである。……さらに工業の手工業者だけでなく、手工業的商人も、新しいブルジョア的存在とますます意識的に対立するようになる。」(S.282.)

ゾンバルトが脚注で「マーチャント・アドヴェンチャラーズ」の名前をあげていることから分かるように、13世紀末期から16世紀にかけて成立する富裕な商人が一括して「ブルジョア＝市民」とされ、ポポロ・グラツ、ノビリ、リッチ等の名称と呼ばれた彼らの、「欲求充足的」な都市の手工業者との対立的性格が強調されるのである。そして彼らの財産＝「市民的富」の源泉は、商業ではなく、「地代の蓄積」の結果にはかならない。

すなわちゾンバルトは、「都市貴族」とよばれるようになる彼らは、「もともと土地所有をもって都市に定住した家族」であり、「後になって都市に定住したすべての人々は……これらの所有地に定住した」こと、そして道路・住宅・店舗等々の建設と賃貸によって、利子・使用料・地代収入が都市貴族のもとに蓄積されたこと、を強調する。

「我々にとって興味深いことは、……都市の地代の大きな部分が不労所得として都市ゲマインデの少数の土地所有家族〔門閥〕の所有となった、という事実である。」(S.288.)

「秘密は暴露された。市民的富の端緒は発見された。イタリア・フランドルンでは13世紀以降(あるいはその以前から)、他の国々では14世紀以降、この貨幣額によって大規模に貨幣・商業取り引きが行われたのであり、したがってそれは、そこから資本が発展しうる原財産と見なすことができる。すなわちそれは蓄積された地代である。」(S.291.)

これがいわゆる「地代蓄積説」である。この説明が帰納的・実証的性格を持つというよりも、論理的要請によって構想されたことは明らかであろう。まず中世の「欲求充足的」な手工業・商業において「剰余価値」

の蓄積は論理的に不可能だとすれば、資本のルーツは、剰余労働の堆積である「封建的富」かあるいはそれを元本とする何らかの蓄積以外には有り得ない。「封建的富」の所有者は「ナールンクの原則」によって行動するから、後者の可能性だけが残される。しかも歴史的に「ブルジョア＝都市貴族」が勃興した時代にはまさに貧富の対立＝階級闘争が激化したのである。ゾンバルトはほぼこのように考えたように思われる。都市貴族の所有地は元来封建的剰余労働に由来する「封建的富」であり、また蓄積された地代の源泉は都市ないし農村の労働者の「剰余価値」なのであって、ゾンバルトは、「封建的剰余価値」の「資本」への漸進的転化(したがってマルクスの暴力的な本現的蓄積論批判)の秘密がこの説明によって暴露された、と考えたのである。

#### f 資本主義的精神の発生

では「資本主義的精神」の発生を彼はどのように考えたのだろうか。ゾンバルトは問題を提出するにあたって、次のように述べているように、一般的な人間の営利衝動から説明することは不可能であり、「ヨーロッパ諸民族に固有の現象」の解明が問題であることを明確に意識していた。

「貨幣は経済活動によって自己増殖するものである、という奇妙な思想を成立させたもの何か、騎士の見解を否定し、商人的・営業の見解を一般的に認めさせたのは何か、を問題としなければならない。……[その場合]人間の『自然』およびそこに内在する衝動に訴えることはまったく適切ではない。独自の資本主義的精神を生み出さなかった中国・インド・古代アメリカ文化のような高度な文化を一目みただけでも、近代資本主義の生成を人間経済の『一般的発展史』として示すことができる、との見解の不十分さを証明するのに十分である。むしろヨーロッパ諸民族に固有の現象が問題なのである。」(S.379.)

次に彼は、「ヨーロッパ諸民族に固有の現象」を説明する手段としての「人種(29)のモメント」を否定しつつ、以下のように続ける。

「また近代資本主義制度を特定の宗教共同体への帰属によって根拠付けることも、私には不十分であるように思われる。プロテスタンティズム——わけでもカルヴィニズムとクェーカー派というその変種において——が資本主義の発展を本質的に促進したことは周知の事実であって、

さらに詳しい基礎付けは不必要なほどである。しかしながらだれかが、(例えばすでに中世末期以来……すでに高度に発達していた資本主義的精神を挙げて)このような説明の試みに対して、プロテスタンティズムの宗教体系は近代資本主義的精神の原因よりも結果である、と異論を提出しようとするならば、彼に対してその見解の誤りを証明することは……困難であろう。」(S.380-381.)

この記述は極めて興味深いものである。というのも、「プロテスタンティズム……が資本主義の発展を本質的に促進したことは周知の事実であ」という指摘は、自分の研究が「ずっと古い諸研究に遡るもの」という前述のヴェーバーの言明と符合すると共に、「周知の事実」という表現から判断して、それが必ずしも珍しいものではなく、むしろ「通説」的に受け取られていた可能性を示唆<sup>(30)</sup>している。とすれば、ゾンバルトの「プロテスタンティズムの宗教体系は近代資本主義的精神の原因よりも結果である」とする立場は、「周知」の見解に対する批判として、つまり「近代資本主義的精神の原因」をさらに遡って追及しようとしたことになるだろう。

少し長いが、ゾンバルトの結論を聞いてみよう。

「私はこうした関連をおよそ次ぎのように考えている。一連の事情が作用して、ヨーロッパ中世のあいだに貨幣財産の価値評価が著しく増大し、通常の限界を突破するのである。……どこでも人間には光り輝く黄金に対する憧憬が内在していることは、だれもが確信する現象である。原始的文化にはこうした憧れが満ちており、それは驚くべき財宝や黄金を求める勇敢な冒険者の伝説・事跡の形を取る傾向がある。……

人間に体質的に付着しているこのような黄金熱は、しかしながら、特定の時代に急性的性格を取るのである。その時代が中世末期である。……我々は、様々な原因が作用して、多くの人口階層において実際上の貨幣需要を増大させた事実を想起しなければならない。我々の知るところでは、最初は純粹に理想的な指向が、それを促進する人々の支払い能力に対する益々大きな要求をもたらした。教皇や国王が飽くことなく掻き集めた膨大な金額を再三にわたって飲み込んだものこそ、なによりも……あの偉大な異教徒に対する闘争と聖地奪還の憧憬であった。確かに当初その成果のかなりの部分は貨幣の仲介なしに行われた。しかし……十字

軍遠征においてますます必要になったイタリア商業共和国の仲介は、現金需要の増大を生み出さねばならなかった。……

だが歴史においてしばしば見られるように、人が最後に到達したものは、到達しようとしたものの正反対であった。すなわち人々は最も理想的な動機に満たされて、神の名誉のために出征した。そうして俗人の精神を持ち帰ったのである。というのも、中世末期に至る所で見られる人生観全体のあの世俗化 [Verweltlichung]こそ、先行する世代が遂行した多数の信仰戦争の直接的帰結だったからである。現世の喜びの感覚を目覚めさせ、奢侈と悦楽への欲望を作り出したのは、ビザンツ人やアラブ人の華やかな文化との接触である。……そうして生活の中心は次第に都市に移り、……また偶然が重なり、物質的に贅沢な暮らしに対する憧れがますます広範な階層に浸透するにつれて、かの憧れを満たすための手段や方法も現れた。こうして個々の人々の手中に、いわば一夜にして大財産が蓄積される時代がくる。オリエントの略奪によってイタリア諸都市は巨万の富を集め始めたが、最も重要なことは、中世末期に貴金属の獲得が急速に増大したことである。

かくして人間の中でかの注目すべき心理学的過程——その経過を最近ジンメルが巧みに叙述した——が再び生じるときがきた。すなわち絶対的手段である貨幣の最高目的への昇格である。<sup>(31)</sup>」(S.381-383.)

以上の論述から明らかのように、ゾンバルトは「近代資本主義的精神の原因」として、十字軍遠征によって生じたヨーロッパ人の営利衝動の覚醒を考えていたのであるが、しかもそれは、「神の名誉」という聖なる目的の、いわば「意図せざる帰結」として成立した「人生観の世俗化」の結果であると解釈されていたのである。その意味で、「ヨーロッパ諸民族に固有の現象」とは一種の歴史的偶然の結果ともいえるだろう。だがこのような解釈は、彼自身の問題提起と矛盾することは明らかである。つまり「歴史的偶然の結果」として生じた「一般的な人間の営利衝動」を「近代資本主義的精神の原因」と見なしていることになるからである。こうした混乱は、ゾンバルトが「営利経済」と「資本主義」を同一視していることから生じたように思われる。

さて営利衝動の覚醒だけでは「資本主義的精神」を構成できないのであって、「計算感覚」・「経済的合理主義」が追加されねばならない。ゾン

バルトは、「[経済的合理主義]が営利衝動と有機的に結合したときに初めて、我々は真の意味での新しい資本主義的精神について語ることができる」(S.391.)と述べて、複式簿記の展開を概観しつつ、両者の展開を一括して「経済的合理主義」の発展として論じている。近代的簿記の成立によって、「営業指揮者の人格から物的財産の分離」が遂行され、企業は「手工業時代の……営業指揮者の偶然性・恣意性から解放される」のである。その意味で複式簿記は、「特殊資本主義的合理性の完成された表現」にほかならない。(S.394.)この合理主義と個人主義の結合によってあの「経済人」が成立するのであり、その「古典的代表者」がヤコブ・フッガーなのである。(S.396.)

しかしゾンバルトは、簿記の発展と経済的合理主義の関係を明確に論じることはなかった。これを論じることは、彼にとって、「ルネサンス文化全体の概観を与えること」を意味したのであり、事実上その探求は放棄されている。「[資本主義的精神によって貨幣獲得が最高目的となる]こうした思想が、いつ、どこで、どのようにして生まれたかは、恐らく永遠に不可解な闇に包まれるだろう。」(S.388.)

だがこの記述に続いて彼は、「資本主義的精神」の担い手とその資質について推測している。それは、「経済的活動による営利以外に他の権力手段を持たない」「平民」であり、「金採掘師や錬金術師の夢想や幻想を持たない」「冷静な性格」の人々であり、「クールな計算と理性的な事柄の把握」ができた人々に違いない。(S.388-389.)ゾンバルトはこのような人々として、「良い境遇にある小売商」と「もぐりの高利貸」をあげ、彼らから「資本主義的精神」が広まった、としている。このことは、資本の元本となった「蓄積された地代」の所有者(=「都市貴族」と「資本主義的精神」の担い手を、ゾンバルトが別々に考えていたことを意味するのである。(未完)

### [注]

- (1) 大塚久雄「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」『大塚久雄著作集』第8巻(岩波書店 1969年)、6および23ページを参照。なおここで「折衷的」といわれているのは、ヴェーバーとプレントナーとの折衷という意味である。



- (2) 例えば『高度資本主義』の訳者である梶山力氏もその訳者序において、また『近代資本主義』の最も詳細な紹介を企てた木村元一『ゾムバルト「近代資本主義」』(春秋社 1949年, 10-12ページ)においても、後述のゾムバルトの言葉にしたがって初版と第2版の相違について指摘されているものの、初版の内容についての実質的な言及はまったくないし(榊原巖「意味理解のドイツ経済学—ウェルナー・ゾムバルト」『社会科学としてのドイツ経済学研究』平凡社 1958年, も同様)、また戸田武雄『ウェーバーとゾムバルト』では、初版と第2版の相違についてまったく触れられていない。唯一の例外は、金井新二『ウェーバーの宗教理論』(東京大学出版会 1991年, 97-101ページ)であり、ウェーバーの「先行者」としてゾムバルト『近代資本主義』初版の「資本主義精神」論が初めて意識的に論じられた。

なお前述の大塚氏は、『株式会社発生史論』(1936年 前掲『著作集』第1巻 1969年)以来一貫して第2版に依拠している。

- (3) *Der moderne Kapitalismus*, 4. Aufl., 1. Bd, München u. Leipzig 1922, S. IX. (第2版は1916年であるが、便宜上第4版に収められている第2版の序文を利用した。)岡崎次郎訳『近世資本主義』(生活社 1942年)第1巻第1分冊, 1ページ。(訳文は必ずしも翻訳によっては異なる。以下その他の文献についても同様である。)
- (4) 戦後ドイツのゾムバルト研究の原型を提出したリンデンラウブは、こうした立場の変化を「貴族的転向」と呼んでいる。(Dieter Lindenlaub, *Richtungskämpfe im Verein für Sozialpolitik, Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Beiheft 53, Wiesbaden 1967, S.328.) リンデンラウブはこの「転向」を1909年以後と考えているが、最近ではプロケが1908年以前としている。(Bernhard vom Brocke, *Werner Sombart (1863-1941) Capitalism-Socialism-His Life, Works and Influence Since Fifty Years, Jahrbuch f. Wirtschaftsgeschichte*, 1992/1, S.145.) さらにアペルは『近代資本主義』初版と翌年の『19世紀のドイツ国民経済』(1903)の間に「画期」を見出だし(Michael Appel, *Werner Sombart Theoretiker und Historiker des modernen Kapitalismus*, Marburg 1992, S.47f.), またゾムバルトに関する初の浩瀚な伝記を上梓したレンガーは、そうした態度の変化が1900年にまで遡ることができると主張している。(Friedrich Lenger, *Werner Sombart 1863-1941 Eine Biographie*, München 1994, S.137ff.) この点については別の機会に論じたい。

- (5) *Der moderne Kapitalismus*, Leipzig 1902, S.X-XII. この点については拙著『グスタフ・シュモラー研究』(御茶の水書房 1993年)、終章、346ページ以下で触れた。レンガーも「ゾンバルトは、『近代資本主義』初版によってマルクスを引き合いに出しつつ博士論文指導者シュモラーから脱出しようと試みた」と指摘している。(Lenger, *a.a.O.*, S.241-2.)
- (6) 初版の書評については, Appel, *a.a.O.*, S.39ff を参照。アペルは、とくにペロウやデルブリュックのような専門の歴史家からかつてのランプレヒトのように厳しく叩かれたことを強調している。
- (7) 「資本主義」という用語の由来を考証したパッソウは、次のように述べている。この言葉は最初ルイ・ブランによって使用され、マルクス『資本論』第1巻が *kapitalistische Produktionsweise* を論述の対象としてから一般に普及し、とりわけ国家社会主義者シェフレがこの言葉を使ってからカトリック社会運動の著述家によって、利子取得に対する倫理的な非難の意味で「熱心に受け入れられた。」そして「最近では、『資本主義』等々の表現は、まったくのところゾンバルトの偉大な(とりわけその最初の把握においてマルクスに強く影響を受けた)『近代資本主義』[1902]によって、一般的な表現となり、あるいは……流行となった。この著作の出版以来、学術的文献においてもこの表現が荒れ狂った。ナウマンによれば、「ゾンバルト教授が大学の学問に初めて資本主義を持ち込み、後に続くことを要求した。」しかし歴史学者が、ペロウのように批判的な人もこの表現を受容したのに対して、「多くの国民経済学者はこの言葉の使用に反対しており、「この表現を使用することに価値を置くのは個々の著述家や潮流だけである。」パッソウはこの「著述家」としてレクシスとヴェーバーを、「潮流」という表現でヴェーバーがそれぞれ編集者であった『社会経済学要綱』*GdS* と『アルヒーフ』の名前を挙げている。したがって「資本主義」を学問的概念として積極的に使用する経済学者は、第1次大戦前では、ゾンバルトの問題提起に好意を寄せた限られた、*GdS* と『アルヒーフ』に執筆したグループであり、その中心にヴェーバーがいたといえよう。

他方パッソウは、*kapitalistischer Geist* についても「その慣用がゾンバルトに遡ること」を指摘している。興味深いことに彼は、「営利衝動」は財産所有者の属性ではないとする立場から、ゾンバルトが「単なる営利衝動」だけではなく「心的諸特性」をもこの言葉によって表現したのは「不適切」であると批判し、またヴェーバーの用語でも、「単な

る営利衝動ではなく、資本とは何の関係もない、とくに「職業理念」・「倫理的生活原則」が問題となる心理的モメントを考えている」のだから、「この表現は彼 [ヴェーバー] の場合とくに相応しくない」と述べていることである。「ゾンバルトの大著が出てから、様々な著述家によってかの [営利衝動の] 指向が kapitlistischer Geist というレッテルをはられた」のであった。(Richard Passow, *Kapitalismus Eine begrifflich-terminologische Studie*, Jena 1918, S.2-4, 93-98.) この論述は、同時代人にとっては kapitlistischer Geist が「慣用」的表現であり、ヴェーバーの *Der Geist des Kapitalismus* がむしろ奇異な表現であったこと、ゾンバルトのオリジナルな表現には「営利衝動」以外の「心的諸特性」が含まれていたのに、後に一般に流布するにつれて「営利衝動」の意味で kapitlistischer Geist が使われるようになったことを示している。

わが国では kapitlistischer Geist という言葉は、ヴェーバーの「資本主義の精神」*der Geist des Kapitalismus* に対する誤解の表現として、ヴェーバー批判者の用語であると理解されているように思われる。例えば、次の記述を参照。「さて、ヴェーバー論文に対する批判者として代表的な地位を占めるのは、何といても新歴史学派の経済学者として著名なルヨ・ブレンターノ教授でしょう。……このルヨ・ブレンターノをはじめとして、批判者たちはほとんどすべて kapitlistischer Geist という用語を使っております。」(大塚久雄「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の精神 再論」、『著作集』第12巻 1986年、192ページ) 大塚氏はゾンバルトもこの「批判者」に含めているが、むしろヴェーバーの用語がゾンバルトの批判として現れたのである。以上の経緯から判断すれば、kapitlistischer Geist を「営利衝動」の意味での「資本家的精神」ではなく、やはり「資本主義的精神」と訳すべきではないだろうか。

- (8) マックス・ヴェーバー／住谷一彦・山田正則訳「資本主義の『精神』に関する反批判」『思想』1980年8号、88ページ。ラッハファールの推測の根拠はトレルチの次の発言である。「[近代の経済発展に対するカルヴィニズムの] 意義は、近ごろマックス・ヴェーバーによって提起されたところであって、ヴェーバーは、彼の側でも、資本主義的精神の本質についてのゾンバルトの明敏な分析を跡づけ [nachgehen]、そしてこの精神の成立にたいする心的な諸前提ならびに諸原因を追究していた。」エルンスト・トレルチ／堀孝彦訳「近代世界の成立に対

するプロテスタンティズムの意義」『トレルチ著作集 8』(ヨルダン社 1984年), 98, 155 ページ。(この論文の初出は1906年であるが、くゝの箇所が、おそらくラッハファールの前述の表現の原因になったために、1911年に削除されている。)

もちろんヴェーバーは、このラッハファールやトレルチの推測に反論し、自分の研究はゾンバルトに刺激されたものではなく、すでにその一部が1897年の講義で行われていたと強調している。

- (9) Max Weber, Die protestantische Ethik und der "Geist" des Kapitalismus, *Archiv f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik*, 20. Bd., 1905, S.19-20. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波書店 1988年), 43-44 ページ, 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(未来社 1994年), 107-108 ページ。(〔 〕の部分は後に削除され、大塚訳には存在しない。) ヴェーバーは第1章「問題 [の提起]」においていく度となくゾンバルトの「初版」に言及しており、この章は完全にゾンバルトを念頭に置いて書いている、という印象を受ける。

なお弟のアルフレートによれば、マックス・ヴェーバーは、第2版が包括的すぎており理論的ではないから初版のほうが「有用」であると述べ (Appel, *a.a.O.*, S.124.), 「理論的考察様式と歴史的考察様式との区別」をゾンバルトから受け取ったことに感謝していたという (Lenger, *a.a.O.*, S.128.)。

- (10) ヴェーバーは、1903年に初版の書評をブレンターノに依頼し、次のように述べている。「我々の専門領域が陥っている歴史の過剰な切り売りという時代にあつて、過ちを犯す勇気がますますなくなっているの、それを蘇らせることが緊急に必要です。さもなければゾンバルトの構成に付着している不十分さは、こうした理論的研究の信用を失わせることのみ役に立つでしょう。」(Lindenlaub, *a.a.O.*, S.327. に引用) ゾンバルトはいわばドン・キホーテだった。

- (11) Vgl., Die römische Campagna. Eine sozialökonomische Studie, *Staats- u. sozialwissenschaftliche Studien*, Bd. 8, heft 3, 1888, Brocke, *a.a.O.*, p.117, Appel, *a.a.O.*, S.25ff, Lenger, *a.a.O.*, S.42ff. シュモラーの内地植民論については、前掲拙書、第5章を参照。

ちなみにこの学位論文については、後の独特の(ラテン語やフランス語の引用あるいは詩が多用される)スタイルに比べて、「彼がこれまで書いたものの中で学問的にはおそらく最良のもの」(プリンクマン)

という皮肉な見方がある。

- (12) Brocke, a.a.O., p.118, Appel, a.a.O., S.28f, Lenger, a.a.O., S.48ff.  
ゾンバルトは1892年『国家学辞典』(初版)に「家内工業」の項目を執筆し、1894年にはビュヒャーを中心とする社会政策学会の手工業調査に協力している。
- (13) Zur Kritik des ökonomischen Systems von Karl Marx, *Archiv f. soziale Gesetzgebung u. Statistik*, 1894. 知念英行編訳『マルクスと社会科学』(新評論 1976)
- (14) Appel, a.a.O., S.29, Lenger, a.a.O., S.79.
- (15) 『資本論』第1巻第1版の序文を参照。『マルクス＝エンゲルス全集』23, 大月書店 1965年, 8—9ページ。
- (16) 歴史学派の心理学主義については、前掲拙書の終章を、オーストリア学派のそれについては、エミール・カウダー／斧田好雄訳『限界効用理論の歴史』(嵯峨野書院 1979年), 128—130ページを参照。なおゾンバルトは「初版」において、「近代国民経済学の重要な理論的方向(なによりもいわゆる『オーストリア学派』)の決定的誤りはこのような事情〔心理的動機と歴史的な社会的環境との関連〕を考慮していないことである」と批判している。(Der moderne Kapitalismus, S.X-XXVII.)

エンゲルスはゾンバルトのこの論文に言及して次のように述べている。「ゾンバルトは、マルクス体系のアウトラインの全体として優れた説明を掲載している。ドイツの教授がマルクスの著作から彼が本当になにをいっていたのかを理解しようと努力したこと、そしてマルクス体系の批判がその反駁ではなく、……むしろそのいっそうの完成への貢献にほかならないと説明しようと努力したこと、これは初めてのことである。……しかしこの把握は広すぎており、……価値法則によって支配される社会の経済的發展段階にとっての価値法則の意義を尽くしてはいない。」(F・エンゲルス「『資本論』第3巻への補遺」, 『全集』25b, 1, 141ページ) エンゲルスは翌年、直接ゾンバルト宛に手紙を書き、「ドイツの大学でもとうとう『資本論』がこのように理解されるようになったのかと、嬉しく思っております」と感謝しているが、カウツキーその他の人への手紙でも、ゾンバルトを「折衷論的マルクス主義者」と呼びつつ、「他の点では大変良いもの」と褒めている。(『全集』39, 371以下, 378—9, 401ページ) ここでエンゲルスが批判している部分は、単純商品生産における労働時間による価値規定をゾンバ

ルトが考慮しておらず、したがって共同体間分業から資本主義的生産段階へと至る過程での価値法則の歴史的意義が無視されている(歴史法則としての価値法則)、という論点である。この対立から分かるように、ゾンバルトは歴史法則としての価値法則という唯物史観を否定し、歴史を推進する人間の「動機」という歴史学派の問題意識を継承している。

レンガーの判断では、ゾンバルトはこの論文によって「修正主義の創造者」(シュパンの言葉)となったが、エンゲルスの全体としての肯定的評価がゾンバルトの修正主義に与えた「中心的」役割を覆い隠してしまった。(Lenger, *a.a.O.*, S.80-83.)

- (17) ゾンバルトは、発展段階をただ「外面的メルクマール」に頼り、「経済過程に存在する多様な精神を区別の基準」(S.55.)としなかったビューヒャーと、「交換のために生産するすべての経済形態を企業とした」(S.69.)シュモラーを批判し、「マルクスの非有機的・革命的把握を、現代の知見に相応しい有機的・進化論的把握」(S.71.)へと展開する必要性を指摘している。こうした「進化論的な段階把握」によって、彼は、資本主義と「共同経済」的意味での社会主義との共存、および社会主義の極めて遠い未来での実現を考えていた。(Vgl., *Dennoch! Theorie und Geschichte der gewerkschaftlichen Arbeiterbewegung*, Jena 1900, 森戸辰男訳『労働組合の理論と歴史』大原社会問題研究所 1921年, Lenger, *a.a.O.*, S.107-108.)

なおゾンバルトの世代に、ドイツ観念論の有機体説的思考とコント・スペンサー流の生物学的・進化論的発想がいかにかに強く結び付いていたかは、例えばシュルツェ＝ゲーヴァニッツの例が示している。拙稿「シュルツェ＝ゲーヴァニッツの社会政策思想——『社会平和』を中心に——」『立教経済学研究』第48巻3号(1995年)、18ページを参照。

- (18) すでにシュモラーの段階理論の中にこうした発想が認められる。前掲拙書、終章の一を参照。
- (19) シュモラーについては、前掲拙書、第6章の一・第7章の二を、ビューヒャーについては、石田真人「カール・ビューヒャーの経済発展段階論」『甲南論集』第13号(1986年)を参照。
- (20) カール・マルクス『経済学批判』序言、『全集』13、6ページ。
- (21) 周知のようにヴェーバーは、「プロ倫」で「伝統主義」の概念を使いながら、ここで展開されたゾンバルトの「欲求充足経済」と「営利経

済」の峻別を批判しているが (Weber, a.a.O., S.25-26. 大塚久雄訳, 49-50 ページ, 梶山力訳・安藤英治編, 113-115 ページ), 後にヴェーバーが、「資本主義」概念を拡大し、「近代資本主義」と峻別したのは、こうしたゾンバルト批判の脈絡で理解すべきであろう。(Weber, *Agrarverhältnisse im Altertum* (1909), *Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Tübingen 1924, S.13-16. 上原専禄・増田四郎監修/渡辺金一・弓削達訳『古代社会経済史——古代農業事情——』東洋経済新報社 1959年, 24-28 ページ)そしてゾンバルトは、前述の「資本主義」をめぐる論争に言及して、「資本主義」概念のポジティブな継続的形成を企てているのはナウマンとヴェーバーであると指摘しつつ、自己の「弱点」を認め、ヴェーバーのこうした批判を受け入れている。(Der kapitalistische Unternehmer, *Archiv f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik*, 29. Bd., 1909, S.690-691, 695, 697.)

- (22) 中世の「同職作業場」の中に「真の肯定的自由の大いなる形態」を見出だしたミュラーは、手工業者の芸術家的性格を指摘し、その「道徳的・文化的・学術的」側面と「人格形成」に対する意義を強調する。原田哲史「アダム・ミュラーにおける自由『抗争』と『均衡』——スミスへの批判と接近——」『四日市大学論集』第6巻2号 1994年, 11-12 ページを参照。

前述のようにドイツにおけるゾンバルト研究史は、彼のロマン主義的旋回の起点をめぐる意見が分かれているが、こうした手工業の概念構成そのものもつ問題点への言及はない。

- (23) ゾンバルトは、前資本主義的商業の利潤率を資料から推定し、その蓄積率が極めて低かったことを論証しようとしている。(S.221ff.)
- (24) この「経済様式 [Wirtschaftsweise]」という言葉はごく希に使用されているが、明確な概念規定はない。
- (25) 前記の「資本主義的企業家」で、彼は具体的な企業家名を例示しているが、それは、シーメンス、ラテナウ、ロスチャイルド、ロックフェラー、カーネギーなどである。(Der kapitalistische Unternehmer, S. 702ff.)
- (26) ここで「指令的・組織的」機能が含まれていないのは、企業の過渡的形態として、企業家の中に「指令的・組織的」機能と「技術的労働者」機能が分離していない「小資本主義的企業」の存在を意識しているからである。(S.201.)
- (27) ゾンバルトは、ここで「剰余価値」という言葉を、利潤の源泉を賃

金労働者の「労働所得」にのみ限定させてしまうために、意識的に回避している。そして彼は、企業家利潤はこの「分け前」の一部であり、企業の内部では労働者の「労働所得」からの控除であるとしても、企業家の介入によって労働生産性が上昇するから、その削減ではないことを強調する。(資本の生産性) (S.212.)

- (28) もう一つの客観的条件とは、賃金労働者の「十分な量の存在」である。自発的な賃金労働者の存在は、「前資本主義的組織」の解体を前提とするから、ここで問題となるのは、「賃金労働以外には生存できない人々」である。それは、暴力的農民追放や共同地の収奪によって生じた、あるいは資本主義的企業との競争に破れて生じた「独立生産者」の没落部分であり、またはこうした独立生産者の家族メンバーであった。(S.215-216.) ゾンバルトは初期のプロレタリアートを「補助的人口」と呼び、その発生史を以下で論じる資本主義成立史の独立した論述対象とせず、第2巻で扱っている。
- (29) 本書では、営利衝動の急速な展開に対して果たしたユダヤ人の役割を認めつつも、「しかし……過大評価すべきではない」と力説されていたが (S.390.)、翌年に出版された啓蒙的著作『19世紀のドイツ国民経済』においては、人種の決定論を批判しつつも、「風土と民族」にかなりの説明を割り当て、「経済生活の特殊資本主義的特質はユダヤ人にとって適合的である」ことが強調されている。(Die deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten Jahrhundert, Berlin 1903, S.132.) ゾンバルトは1903年には、「資本主義的精神」と「ユダヤ人」との関連に注目していた。金井氏は、すでに『近代資本主義』においてユダヤ人が「資本主義」の担い手とされていると主張し、それは1903年以降だとするマーシャルの所説を「明らかな誤り」と断定しているが、むしろマーシャルのほうが正しい。(金井, 前掲書, 115ページの注(4)を参照)
- (30) ゾンバルトは、「周知の事実であって、さらに詳しい基礎付けは不必要なほどである。」という文章に脚注をつけ、その例としてゴータインの著作 [Wirtschaftsgeschichte des Schwarzwaldes] から、次の部分を引用している。「資本主義的発展の足跡を追跡する人は、ヨーロッパのどの国でもそうであるが、カルヴィニストのディアスポラ[居住地区]が同時に資本経済 [Kapitalwirtschaft] の養成所である、という同一の事実にもいつも突き当たるであろう。」 (S.381.)

ヴェーバーもゴータインのまったく同一の箇所を引用していることもあって (Weber, Die protestantische Ethik und der "Geist" des



Kapitalismus, S.9. 大塚久雄訳, 19 ページ, 梶山力訳・安藤英治編, 81 ページ——ここで詳しく論じることはできないが, 邦訳はいずれも Kapitalwirtschaft を「資本主義経済」としているが, これはロツシャーに由来する言葉であって, ゾンバルトがいうような「資本主義」の意味は含まれていない。), ブロケは, ヴェーバーの問題設定がカルヴィニズムとクエーカーに関するゾンバルトの前述の論述に導かれたもの, と解釈している。(Brocke, a.a.O., p.138.) だが注(8)で触れたように, ヴェーバー自身の弁明を信頼する限り, これはやはり不当な解釈であろう。しかしながら, これまでの論述から明らかなように, ゾンバルトのヴェーバーに対する「直接的影響」を否定しても, 「それにも拘らず『近代資本主義』の [ヴェーバー] に対する影響は著しいもの, とするレンガーの判断 (Lenger, a.a.O., S.241-2.), あるいはヴェーバーが「ゾンバルトの議論をいっそう尖鋭化させ徹底させた」, という金井氏の主張 (金井, 前掲書, 101 ページ) に私も賛成である。

- (31) 本書にはしばしばジンメルへの言及が見られるが, ヴェーバーは, 「ゾンバルトの見解が, ジンメル『貨幣の哲学』の最後の章のすばらしい表現と結び付いている」ことに注意を促している。(Weber, a.a.O., S.15. 大塚久雄訳, 31 ページ, 梶山力訳・安藤英治編, 93 ページ)

Der Ursprung der Diskussion über  
den modernen Kapitalismus (1)  
—Zur Bedeutung von Werner Sombarts  
“Der moderne Kapitalismus” (1. Aufl. 1902.)—

Shin-ichi TAMURA

Mit der Veröffentlichung des Buches “Der moderne Kapitalismus” führte Sombart die Begriffe “Kapitalismus” und “kapitalistischer Geist” erstmals in die wissenschaftliche Diskussion in Deutschland ein. Sein Werk und seine Thesen riefen heftige Auseinandersetzungen unter zeitgenössischen Gelehrten hervor. Daß er 1916 sein Buch über den modernen Kapitalismus völlig neu konzipierte, trug jedoch dazu bei, diese seine führende Rolle in der deutschen Sozialwissenschaft um die Jahrhundertwende zu verdecken.

Was Sombart mit dem Erstauflage des “modernen Kapitalismus” zu leisten versuchte, war eine methodische und sozialpolitische Emanzipation von seinem Lehrer Gustav von Schmoller. In Auseinandersetzung mit den Stufentheorien der hitorischen Schule und unter kritischer Rezpition von Marx’ Wert- und Kapitaltheorie entwickelte Sombart den Begriff des Wirtschaftssystems. Er vertrat die Ansicht, das Handwerk sei ein die vorkapitalitische Wirtschaftsverfassung charakterisierendes Wirtschaftssystem, in dem das “Nahrungsprinzip” gelte, und in das auch der mittelalterliche Handel einbezogen sei. Den Kapitalismus dagegen definierte er als das durch kapitalistische Unternehmung Sachvermögen (Kapital) verwertende Wirtschaftssystem, in dem das “Erwerbsprinzip” dominiert.

Indem er auf der begrifflichen Ebene Handwerk und Kapitalismus einander gegenüberstellte, leugnete Sombart die kapitalbildende Kraft des mittelalterlichen Handels. Für die Genesis des Kapitalismus schien ihm zum einen die Akkumulation städtischer Grundrente ausschlaggebend, zum

andern schien ihm der kapitalistische Geist erforderlich, um die akkumulierten Geldbeträge in Kapital zu verwandeln. Unter "kapitalistischem Geist" verstand Sombart "das Gewinnstreben, den kalkulatorischen Sinn und den ökonomischen Rationalismus" als die dem kapitalistischen Unternehmer eigentlichen "Seelenstimungen". Von diesen Elementen betrachtete er das seit den Kreuzzügen erwachte Gewinnstreben als das wichtigste. Es muss allerdings festgestellt werden, daß Sombart trotz aller neuen Erkenntnisse den Kausalnexus zwischen Erwerbsstreben und dem ökonomischen Rationalismus einerseits und zwischen Kapitalbesitzer und dem kapitalistischen Geist andererseits nicht genügend analysieren konnte.